



どこの河原にも転がっているただの石ころ。少し削るとアート作品になるか。 作：橋本清孝

JANUARY 2019



記念号



コルカタ（インド）のフーグリー川に沿った市場、この人ごみに普通にトラックが行き交う

聖徳太子一四〇〇年忌に思う

だんだん30号の節目にひと言ご挨拶します。

「だんだん」は弊社設立20周年記念事業として発刊されました。それがもう30号になるとは月日の過ぎるの早いものです。代表取締役を譲り、会長職になってみると、関西経済同友会や、財団法人大阪地域振興調査会の仕事でますます多忙を極める日々である。

弊社設立以来、地元上町台地のまちづくりに関わり、一昨年から聖徳太子1400年忌に向けたプロジェクトを立ち上げて活動している。そうしたご縁もあり、2018年は仏教に目覚め、1月にはスリランカ、5月にバングラデシュ、10月は東インド（バングラと併せてベンガル語圏2・2億人以上）を訪れた。

スリランカでは上座部仏教が生活に密着している現場を体験。東インドはヒンドゥー教、バングラデシュはイスラム教で、遺跡であるがブッダガヤの大菩提寺には熱心な仏教徒が世界から訪れていた。ヒンドゥー教と仏教の近しい相互関係はその現場でこそ深く感じる事ができた。丁度コルカタのドウルガ・プジャ祭の最中で、カーリー寺院では大量のヤギが目の前で生贄に供され、その裏でどんどん取引されていく。究極の現世利益を追い求める庶民の姿に圧倒されるが、大乘仏教にも通底する観念であるかもしれない。それは釈迦の教えとは相当乖離した行動様式に思える。

コルカタの博物館で多くの仏像を見た。仏像は釈迦の教えを守らず、ガンダーラで1〜2世紀にギリシャ人が端正な釈迦像を彫ったことから始まる。その男前の顔を見ていると不謹慎ながら、女性にもたてたろうなと思わずにはおれない。

株式会社ダン計画研究所 会長 吉野 国夫

対話のライブ感 創刊30号を振り返る

新年おめでとうございます。今年も弊社をどうぞよろしくお願い申し上げます。

この「だんだん」創刊は、現会長の吉野と私が、とあるバーで雑談している中での思いつき（まじめにダンの将来を語る場です）が出发点です。タイトルにしても「だんだん1個だけやと何となく締まらないし、だんだん「でや？」と。二人とも酔っ払っていたのですね……。

初代編集長を命じられ何号が続けて「編集後記」も担当。ある日、お手紙を頂戴しました。そこには「だんだん」というのは四国、中国地方の方言で「ありがたう」という意味です」とあり、驚きました。その後、出雲を舞台とするNHK朝の連続テレビドラマ小説のタイトルとしても登場し、今ではすっかり「ありがたう」という意味もありまして」と後付け説明に使っております！

この間、多くの方々に冒頭対話にご登場いただき、誠にありがとうございました。私は自分の知らないこと、わからないことを誰かに口頭で教えていただくことがとても好きです。対話＝ダイアログを通じて、目に見えない知をあたかも物理的にこちらの脳に分けていただいているようなライブ感があります。

今号の対話にはアートローグ代表の鈴木大輔さんにご登場いただきました。社名はアートとダイアログをかけあわせた造語とのこと。デザイン・シンキングより一歩進んだ「アート・シンキング」をテーマとするダイアログ、皆さまのヒントになれば幸いです。

株式会社ダン計画研究所 代表取締役 青木(宮尾)展子